総評

作家　高橋克彦

いずれも秀作

与えられた枚数の関わりで例年は私が特に推した作品、あるいはどこか気になった作品を重点にすることが常であったが、今回は各県ごとの優秀作すべてに私なりの感想を記してみたいと思う。単に私の嗜好に偏ったものとなるかも知れないが、今後の参考として読んでいただければありがたい。

青森県　佐藤那実さん

まず際立っているのは「苦しい。息が出来ない。足が動かない」といういきなりの書き出しだ。読み手は一体なにが起きたのか、と緊張に襲われる、加えて中程に登場する祖母の話し言葉の見事さ。表情から孫を思う心の優しさまではっきりと伝わってくる…上手いなぁ、とほとほと感心した。なかなかここまで描写できるものではない。残念なのは祖母の病と佐藤さんの患っている症状が異なる点で、ではおばあちゃんのように体を鍛えて頑張ろう、とはいかないところにある。テーマである大きな力とは少し結びつかない。そこが勿体ない気がした。

岩手県　及川陽実さん

辛い壮絶な体験を経たことで得た多くの人々からの励ましと思いやりの心。丁寧に綴られている文章には臨場感もあり、読み手の方もついつい応援してしまいたくなるが、なんと言っても秀逸なのは、彼女の胸の奥で正確に鳴り続ける心臓の機械弁の音。これを皆から与えられた「思いやりの音」と捉える感受性の素晴らしさ。思わず涙した。

秋田県　柿崎正宗君

文句なしの達者な文章。場面の雰囲気や当人の失敗の動転などが目にしているごとくこちらに伝わってくる。緊張の中の失敗談としてなら「この年齢でよくぞここまで」と褒めちぎるしかないが、肝心のこの話が大きな力というテーマとどう繋がるか、それは気になった。無理に最後の部分を付け足した感があって私は首を捻った。

宮城県　渡邊里穂さん

正直私はこの作文が良く理解できない。物語の展開の上手さに最初は唸ったものの、再読すると祖父は里穂さんが十分に物心つくまで可愛がってくれたことが分かる。それをどうして忘れて祖父が大嫌いになったのだろうか。その部分が今一つ曖昧で、素直に頷けないのだ。けれど構成力は抜きん出ている。

山形県　桑嶋愛さん

惜しい、と思った。女の子なのにこれほど応援団の学ランに憧れ、紆余曲折を経た末にようやく実現した喜び。読み手は必ずそのときの気持ちや踏ん張りぶりを知りたいと思う。なのにあっさりと片付けてしまっている。傑出して面白い素材だっただけに残念としか言いようがない。来年の報告に期待したい。

福島県　今村真生さん

単に作文の上手下手という観点で言うなら一番は今村さんの作品かも知れない。はらはらさせる展開の上手さ、テーマの明瞭さ、そして結論部分の余韻と決意。どこにも隙がない。けれど私が僅かに引っかかりを覚えたのは、このエピソードを誕生日に毎年母親が教えるという部分。この年頃になれば友達だって来ているに違いない。その場で母親がそういう話をするだろうかと首を傾げたくなる。

新潟県　山家生流君

読書感想文のコンクールではないので前半は抵抗を覚えたが、後半の読書で得たものを自分の大きな力に変えていく実例を読むに至って衝撃を覚えた。これほどに柔軟な吸収力は賞賛に値する。同様に本を書いている側の私にすれば最も嬉しいことでもある。文章の力強さにも感心した。

以上が私の感想であるが、番外として秋田県の大坂美聡さんの作品についても触れておきたい。優秀作は一県一作の決まりなので入選に留まったものの、大坂さんのひたすら絵に向けられた情熱の凄さと、それを伝える文章の見事さには圧倒された。絵の魅力も存分に伝わってくる。あまりに特異な素材なので残念な結果となったものの、私個人にとっては今回の大きな収穫であった。